ら新たな状況に対応しているのは，日本とは異なり十分な行政サービスや社会保障が得られないアフリカの地域社会であるからこそ際立つ主体的対応として特徴づけられるように思える．

なお，第Ⅱ部については，実務経験者ならではの視点が生かされていると感じられるが，トピックがガバナンスや政策レベルの分析に偏重している印象を受ける．あとがきにもあるように，「普通の人々」が内発的発展の主要な担い手であるならば，第Ⅰ部の分析にあるような草の根レベルとナショナル／グローバルレベルの動向を往還するような事例をもっと示して欲しいと感じた．その内容が，今後内発的発展を支援することを目指す人々に対して具体的なアイデアを示すと考えるからである．そのようななかでも，8 章のまとめには重要な示唆がある．すなわち，地域の事情を顧みないという過ちを繰り返す援助が実は私たちの社会のあり方を反映しており，私たちはそこから自分の社会についても理解を深めることができる，という指摘だが，それは異文化のぶつかり合いのなかから創造性が育まれ，そこから相互に手本交換を目指すという内発的発展論の重要なポイントとつながっている．

本書には多くの重要な示唆がちりばめられている．今後，このテーマを深めようとする研究者・実践者にとって本書の事例群が重要な参照例となることは間違いないであろう．

引　用　文　献

保母武彦．1996.『内発的発展論と日本の農山村』岩波書店.

宮本憲一・遠藤宏一．1998.『地域経営と内発的発展―農村と都市の共生をもとめて』農文協.

鶴見和子．1989.「内発的発展論の系譜」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会.

クリスチャン・ダニエルス編.『東南アジア大陸部―山地民の歴史と文化』言叢社，2014 年，348 p.

堀江未央 *

本書は，これまで史料的限界から実証的研究が十分に行なわれてこなかった，東南アジア大陸部における山地民の歴史的役割に光を当てるという意欲的かつ野心的な書である．国民国家単位で記述されてきた東南アジアの歴史に対する批判的意識のもと，従来対立関係で描かれがちであった山地民と盆地のタイ系民族との歴史的関係性を検証するべく，2006 年度から 2013 年度まで行なわれた共同研究の研究成果である．

また，本書の議論を深化させるための論敵と位置づけられているのが，共同研究の進行中に出版されたジェームズ・スコットの *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*（邦訳『ゾミア―脱国家の世界史』．以下『ゾミア』と略す）である．山地の社会と文化，生業さえもが，国家による支配を回避する目的で編み出されたとするスコットの主張に対して，各論者がさまざまな角度から山地と盆地の多様な関係を論じている．東南アジア大陸部山地のほぼ全域を一挙に論じたスコットの大著の

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

のち，特定の地域や人々の個別事例に立ち返り，精緻で実証的な分析を行なっている点が本書の最大の特色であり，魅力であるといえよう．

本書が「タイ文化圏」と総称するのは，中国雲南省からタイ，ラオス，ミャンマーにわたり，王朝国家の影響を受けつつ，複数の盆地国家と多様な民族，多様な言語が交錯してきた地域である．これらの地域社会を理解するため，歴史学だけでなく，文化人類学，言語学，農学など学際的アプローチを採っている．

本書は3部から成り，その構成は以下のとおりである．

序論（クリスチャン・ダニエルス）
第1部　変わる山地民の歴史像
　第一章　山地民から見た国家と権力―ラフの例から（片岡樹）
　第二章　ラワ―タイ関係をめぐるナラティブとメタ・ナラティブ（飯島明子）
　第三章　雲南西南部タイ人政権における山地民の役割―1792年～1836年ムン・コーンにおける国内紛争から読み取れる史像（クリスチャン・ダニエルス）
　第四章　「周縁」からみた仏教史―シャン州仏教史の試み（村上忠良）
　第五章　山地民にとっての文字―中国雲南省ワ族の事例から（山田敦士）
第2部　家族の歴史
　第六章　タイにおけるユーミエンの家族構成の社会史―合同家族から核家族へ（吉野晃）
　第七章　タイ文化圏における低人口増加率の検討―1971年から2006年におけるラオス北部の一村の経験から（富田晋介，ネイサン・バデノック）
第3部　農耕の技術
　第八章　山地民としてのタイ Tay―ラオスにおける生産技術の諸相から（園江満）

次に，順を追って内容を概観する．

第1部「変わる山地民の歴史像」は，5本の論文を有する最もボリュームのある部分である．

片岡論文では，雲南省西南部，ミャンマー，タイの山地に住むラフを事例に，ラフの抱く国家像を論ずる．片岡は，架空の国家が存在するかのようにふるまうような，山地民における国家の「仮定的構造」［リーチ 1995: 320］に着目する．ラフは，清朝の直接統治や西欧植民地主義の到来などの動乱のなかで一時的に自立的政体を確立するが，その瓦解ののち千年王国主義的な宗教運動を起こす．これはスコットの述べる国家からの解放というより，失われたラフの“国家”の回復を願う運動とみることができる．ラフ語の「国家（ムミ）」，「王（ジョモ）」の内容の分析を通して，それらが多分に架空性を帯びていることを指摘し，これら架空性も含めた王権研究の必要性を指摘する．

飯島論文では，タイの「山地民」のなかで

も特に「影の薄い」ラワとタイとの関係を論ずる．18 世紀頃の年代記を中心とした文献から両者の関係を拾い集め，先住民ラワと征服者タイの間に「『対等な』共生関係のナラティブ」（p. 74）を確認する．現在みられる文明人タイと山地民ラワの断絶は，国家化のなかで，コン・ムアン（都市に住む人）とチャーオ・パー（森の民）を対比的に描くメタ・ナラティブとともに誕生したものであり，本来タイと対置される関係になかったラワのコン・ムアン化を文明化や国家化ということはできないと述べる．

続くダニエルス論文は，清朝の間接支配下にあったタイ人政権ムン・コーン（現・雲南省徳宏州芒市）で 18 世紀末に発生した 40 年にわたる紛争を取り上げ，暴力を含む山地民・タイ人関係を年代記から読み解く．複雑な紛争の変遷はここで要約できないが，タイ人と親近性のあったドァアーンの高官登用とその職権乱用によってタイ人間に派閥争いが起こり，そこに傭兵としてジンポーや漢人が動員されたことで長引いた紛争であった．低地社会の安定が諸山地民の協力で成り立っていたこと，そして，山地民が一定の統率力をもち，利益のためにタイ人政権の策謀に柔軟に対応していたことから，山地民の国家回避というスコットの主張を批判する．

村上論文は，シャン州を中心とするミャンマー東北部から雲南省徳宏州一帯の仏教伝播の分析によって，従来の上座仏教研究における王朝中心史観に疑義を呈する．当該地域に存在する諸教派のうち，ポイキョーン派，トーネ派，メンキョー派，チョーティ派の分析から，人の移動による活発な宗教交流が示される．この地域は大きな政体がなく，安定的な僧団の活動は困難であったが，それゆえに，王による正教の布教か，政権の弾圧を逃れた異端派の流入か，という従来の議論とは異なる，政体の意図とは無関係に動く僧団の姿がみられた．また，同じ教派を受容したタイ人とパラウンにおいても，伝播の道筋はタイ→パラウンのみでなく，パラウン→タイもあったと指摘する．

山田論文は，従来無文字であったワ族の文字使用について言語学的観点から論じる．特に，20 世紀初頭に宣教師が導入したアルファベット式表記と，それを改良した中国政府式表記の使用に関する報告である．中国政府式の現状については，標準語の設定によって他方言の話者が発音を正確に転写できなくなること，また，文字化に伴い発音の方が文字に引きずられて変化することが示される．宣教師式表記については，タイ・ミャンマーで近年改良が行なわれているが，リテラシー能力の向上よりも書物として「持っていること」の方が重視されているのではないかと指摘する．そして，中国政府式表記の低い普及率に対し，諸方言に汎用性のある転写法を確立すべきと提案する．

続く第 2 部「家族の歴史」は，20 世紀半ば以降のタイ文化圏における家族形態の変化を論じる．

吉野論文は，タイの山地に居住するユーミエンにおける父系合同家族〈ピャオ〉が，1960 年代から徐々に核家族へと進む状況を報告する．従来開拓型焼畑耕作民であった

ユーミエンは，父母を頂点とし，複数の息子夫婦の核家族〈トイ〉を内包する父系合同家族〈ピャオ〉の形態を取っていた．しかし，主流換金作物の芥子が 1958 年に栽培禁止になると，換金作物の多様化によりトイの経済的自立が進み，さらに 1989 年以降の商業的森林伐採禁止令によって出稼ぎが促進され，ピャオの分居化が進展する．現在，多くのピャオは耕作・居住単位を分離しているが，ピャオの祖先を祀る〈家先〉の祭壇は分離せず，儀礼単位としてのみ維持されている．

続く富田・バデノック論文は，タイ文化圏における人口移動の社会的影響を理解するために，まず基礎となる自然増加率をラオス北部山間盆地の一村の通時データから分析する．ラオスの他地域では，多産多死から近代医療技術の進展によって多産少死に向かい，人口増加率が高まるのに対し，当該村では人口増加率が低く，低出生・低死亡の傾向を示す．この傾向は近代医療の進展以前からであり，近代医療では説明できない．推察される原因は，混乱が少なく安定した時期には社会規範による出生規制がかかり，死亡率も低くなるというものである．この結果は，今後人口移動の激しい村落や山地民を分析する際の比較対象となる．

第 3 部「農耕の技術」には，園江の論文が収められている．園江は，低平地で水田農業を行なう仏教徒＝タイ系民族という通念に対して，農耕技術の面から疑念を提起する．ラオス北部と，タイ文化圏ではない北東ラオスの脊梁山脈を対象に，農具の形状や名称を分析し，タイ系民族と非タイ系民族の稲作技術交流の痕跡を手繰る．そして，ラオス北部のタイ系民族が，モン・クメール系民族が行なう陸稲中心の稲作から，次第に小規模で集約的な水田農耕を発展させ，山間盆地のムアンを形成したとの推論を導き出す．そして，現在低投入型水田農耕が行なわれる一帯でも，水田不適地の脊梁山脈には陸稲技術が残存することから，タイ系民族は水田技術獲得ののちに陸稲技術を取り入れたのではなく，そもそも陸稲技術を有していたと結論づける．

以上，多分野の専門家によって豊かな議論が展開されている．編者のダニエルスは，かねてより国家の単位に囚われないタイ文化圏という概念の重要性を訴え，他分野の研究者との連携のもと，歴史のみならず物質文化や農耕技術などさまざまな観点から当該社会の理解に取り組んできた研究者である．本書は，その研究蓄積の最新の一冊という位置づけにある．国家中心史観への批判的態度という点ではスコットと共通しているものの，本書からは実証主義にこだわる真摯な姿勢がみて取れる．

本書は論敵として『ゾミア』を挙げているが，前半が 18 世紀にまで遡り，山地社会の歴史の検証のかたちを採るのに対し，後半に向かうにつれて時代深度は浅くなり，議論は『ゾミア』への応答を超えて展開してゆく．前半の片岡，飯島，ダニエルス，村上諸論文においては，山地民の国家回避というスコットの主張への批判的検証だけでなく，スコットの各論には評価すべき点もあることが有効に示されている．一方，続く山田，吉野，富田・バデノック諸論文は現代的現象を扱い，

国民国家からの介入が進むなかでタイ文化圏の社会が如何に変化してきたのかを微細に検討しており，文字使用や人口学など新たな視点からの分析も加わって興味深い．もっとも，スコットは歴史的に山地の社会構造が平地との関係に応じて柔軟に変化してきたことも論じており，それと照らし合わせると本書の議論をどのように位置づけることが可能か，第 2 部の各論文でも少し触れられていると，さらに議論が深まり，前半と後半との連続性も増しただろう．第 3 部の園江論文についても，平地と山地の農耕技術の交流という観点からみると，スコットの述べる逃避的農業や平地民と山地民の可逆性というアイデアをどのように評することが可能か，農学的見地からの意見を聞きたいと感じた．

本書全体を通じて浮かび上がってくるのは，逃避や対立だけではない，相互依存や協同性を含む平地―山地関係と交流の軌跡である．『ゾミア』によって，東南アジア大陸部の平地と山地の歴史的関係がこれまで以上に焦点化されつつある今，本書のような良質の議論が深化していくのは後続の研究者として非常にわくわくさせられるものである．本書にはあとがきがないため，本書を通して山地民に関するいかなる新たな姿が明らかになったのかは総括されていない．それは，当該地域の著しい多様性に依ると同時に，これらの研究のいくつかが現在進行中であることも関係しているだろう．しかしそのことはまさに，このような緻密かつ堅実な地域研究が通時的に続けられていることの証左である．

引　用　文　献

Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.

スコット，ジェームズ　C. 2013.『ゾミア―脱国家の世界史』佐藤仁監修，池田和人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈訳，みすず書房.

リーチ，E.R. 1995.『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳，弘文堂.